能登ライフ体験ツアーに行くぞー！

あるメールマガジンを見ていると、「能登ライフ体験ツアー」という文字に目に留まった。「地域づくり」「田舎暮らし」「里山里海」「国際協力」などのキーワードが続く。これらに関心のある人が対象とのこと。

マチ（都会）育ちの僕のような人間にとって、お試しツアーは地方の暮らしを知る貴重な機会だ。９月の３連休の２泊３日。案内役は「のとガール」・・・って一体、誰？　ま、それはツアーに行けば分かるだろう。僕は参加申込みのメールを送った。

はじめての石川県。関東に住む僕はどう行けばよいのだろう？　東京から鉄道で行く場合の経路を検索してみると、上越新幹線で越後湯沢に行き、そこで特急はくたかに乗り換えるのがよさそうだ。たっぷり半日の移動。せっかくなので金沢で前後１泊ずつ加えることにする。

ちなみに、飛行機だと羽田から１時間くらいのフライトで行けるようだ。また、北陸新幹線が開通すれば東京と金沢を２時間半くらいで結ぶことになるらしい。大都市との間の交通が整備されるのは必ずしもよいことづくしではないかもしれない。それでも、多くの人たちにとって便利になることは間違いない。自分が実際に旅することでそれを実感できる。

９月１５日。真夏のように眩しい快晴の朝８時半。金沢駅で集合した一行は小型バスに乗り込み、いざ出発。発車するとすぐにツアーの説明と全員の自己紹介。

ツアー参加者は合計６名（注：のとガール以外の登場人物名はすべて僕が勝手に付けた愛称です）。順不同で①東北の被災地で復興のためにエコツーリズムを立ち上げようと準備中のケロさん、②地方への移住を考えているデザイナーのザンスーさん、③地方の活性化に関心のある大学院生のノッポさん、④ベトナムからの留学生ノイさん、⑤関東からは筆者のみ。もうひとりは部分参加で、２日目から合流するとのこと。それぞれのテーマを携えて持って集まった仲間だ。

案内役の「のとガール」は総勢５名で、全員が青年海外協力隊経験者とのこと。複数なら「ガールズ」じゃないのか！？「ズ」はどこに行ったんだ！？・・・と心のなかでプチツッコミ（面と向かって言う度胸なし）。もしかすると「山ガール」のように属性を示すということなのだろうか。

それはともかく、のとガールの３名（あきさん、くみさん、ゆかさん）が全行程に同行。①リーダーはあきさん。申込みからメールで何度かやり取りしたが、細かいところまで心遣いをしてくれる人だ。実際に会っての第一印象は「頼れる姐さん」。②ツアーの詳しい中身についての説明はくみさん。よく通る声でガッツありそう。③もうひとりはゆかさん。のとガールのなかでは最も新しいメンバーとのこと。

バスにいない２人は訪問先で待っているとのこと。６人の参加者に５人のガイド。何という手厚さ！

能登に立派な島があったぞー！

クルマで走れる日本唯一の砂浜という千里浜（ちりはま）に寄る。広い空、果てしない水平線。チョー気持ちいーっ！

砂浜を出発して能登有料道路に戻る（近いうちに無料になるとのこと）。ここで、これまでの不覚を恥じなくてはならない。能登半島の横っちょに島があっとは！　恥ずかしながらこのツアーまでまったく認識していなかった（ごめんなさい！）。

アネゴに説教されているかのように低姿勢のスタッフたち

バスは橋を渡って、その能登島へ向かう。１０時半に能登島の「のとじまファーム」に到着。かつての果樹園の多くが耕作放棄地になっているとのこと。そのような土地を活用した新しい農業について説明を受ける。話してくれるのは今回４人目ののとガール、なつえさんだ。頼れるアネゴのオーラが第一印象からあふれ出る。アパレル業界から青年海外協力隊へ。そして能登に移住し、「のとじまファーム」の立ち上げからマネージャー就任まで。なつえさんの経歴だけでも十分に興味深い。

行政の取り組みについて七尾市の担当者も説明してくれた。「世界農業遺産」に認定されたこと、一次産業を二次・三次産業と結びつけること、などについ

て。恥ずかしながら「六次産業化」という言葉を始めて知った。最初聞いたときは「独自産業化」かと思ってしまった・・・。ツアーの冒頭から「恥ずかしながら」の連続である。

食用のオクラの花

お昼になる。地元の食材が鏤められたお弁当をいただく。まるで宝箱だ。作ってくれた島育ちのおかあさんの話を聞く。すすきが風に揺れて「風流」だとか、軒先に吊るされた玉葱が「アート」だとか、自分たちには当たり前のことがマチから来た人たちには新鮮に眩しく映る。その反応がこんどは地元の人たちにとって新鮮だという。

宝物がお腹に詰まった幸せを感じながら農作業体験を開始。我々に託された作業は、ブルーベリー畑のネット外し。実がなる時期には、鳥たちに食べられるのを防ぐために木々の上を網で覆うのだ。収穫期が終わると次の年まで巻き取っておく。高いところに手が届くノッポさんが大活躍。炎天下に上を向いての野良仕事はキツい。マチの人間にとっては、その辛さを体で知ることに意味がある。

汗とクモの巣にまみれ作業完了。心地よい疲労のなか、自家製スイカを切ってもらう。その畑から生産されたブルーベリーのジュースを試飲。商品開発はアネゴにとってお手のもの。酸っぱさが肉体労働の後に心地よい。それを使ったゼリーもいただいた。

ファームについての話をさらに聞く。スタッフのナマの話も興味深い。ひとりは、もともと農業やりたくて入社した若人。もうひとりはかなりの変り種。アニメをヨーロッパに輸出する会社に勤めていたところ倒産してしまい、就職活動で縁あってたまたま採用されたという青年。物腰は某ベレー帽の戦場カメラマンふう。それぞれの人生模様を紡いで成り立っている畑なのだ。

えのめ漁港へ行くぞー！

のとじまファームを出発し、島の東に進む。「えのめ」という名の漁港が次の訪問先。この日泊まる民宿「えのめ荘」に到着。玄関前には「のとライフ御一行様」と味わい深い文字が。今夜は我々だけが客のようだ。猫たちが何匹か玄関前で寝そべっている。暑さにまいってダラけきっているオトナ猫たちを尻目に、まだ若いコドモ猫一匹が寄ってきて遊んでくれる。君が営業担当なんだね。ニャイス・トゥー・ミート・ユー！

荷物だけ置いて、まずは港を散策。宿のおかみさんとそのお父さんに案内してもらう。港で魚をさばく女性たちに出会う。売り物でなく、自分の家族や親戚たちで食べるための下ごしらえだそうだ。

このあたりでは半農半漁がごく普通らしい。夜明け前（深夜）から漁に出て、陸に上がってからも田畑で仕事。なんというタフさであろうか。

えのめ荘に戻り、風呂で汗を流してから夕食。暑く盛りだくさんの一日を終えてのビールは美味い。クーっ！と自然に声が出てしまう。宿のおかあさん（後におかみさんのおばさんにあたる人と分かる）が海の幸を炉

漁師たちを守る神社。その神社を守るガラスの囲い

端で焼いてくれる。白貝、サザエ、サヨリ（だったっけ？サンマを小ぶりにしたような魚です）、イカ、エビ、玉ねぎ、ピーマン、焼きおにぎりまで、すべて絶品！

夕食後は公民館にお邪魔して、祭りの稽古を特別に見させてもらう。この時期、毎日のようにどこかで祭りが開かれているらしい。踊る獅子。弾む太鼓。光る汗。子供からじっちゃん世代まで。どの顔も輝いている。

伝統の獅子舞。練習時の足は今ふうの色鮮やかなサンダル

宿に戻ってからもおかみさんは興味津々な我々の話し相手をしてくれる。若い頃はマチで働いていたそうだ。最初の勤務地は偶然にも僕の生まれ育ったところ。もしかしたら当時、電車とか道のどこかで知らずに偶然会ってたかもね、などと笑いながら話す。

お父さんが民宿を始めたので、それを手伝うために単身Uターンしたのだそうだ。マチでの経験は、きっと民宿業に役だっていることだろう。

おかみさんは「能登島コンシェルジュ委員会」というグループでも活躍中。このグループは「こんかいね」という名の新聞も作っている。「こんかいね」とは京都の「おいでやす」のような意味だろうか。手作り感に溢れる素敵な新聞だ（注：委員会のブログで新聞の現物サンプルを見ることができる）。新聞のロゴマークは、左手を能登の形にした地元定番の構図だ。そこに、ひょうたんのような能登島を描き加える。これを、各号の編集担当者が毎回手描きするので、一回ごとに微妙に違って味わい深い。ある号では、肝心の能登島を描き忘れてしまったらしく、左手だけしかない。これもご愛嬌。プロが作るなら洗練されたデザインで勝負するほうがよいが、色んな人たちが交代・分担しながら作るなら、敷居は低いほうがよい。僕は一発で「こんかいね」のファンになってしまった。

宿では男子、女子それぞれに別れて相部屋となる。男子はノッポさんと僕の２名だけ。川の字ならぬ「リ」の字に並んで寝る。右側の長い線がノッポさん。左の短い（そして寝相の悪い）のが僕。って、そんな解説、要らんかいね？

長いけどあっという間の１日目が終わる。旅は２日目に続く。

２日目の朝も快晴

翌朝、ノッポさんは早くから起床して身支度を整えている。エラいね。僕もよろよろと重い腰を上げて活動開始。旅先ならではの「日本の正しい朝食」をいただく。能登の食べ物はすべておいしい。

えのめ荘の一家との別れを惜しみながらバスに乗り込む。５、６匹の猫一家（？）もわらわらと出てきて我々を見送ってくれる（というのは勝手な妄想で、客が去ったあとにもらえるであろう朝食が目当てかもしれないが）。グッバイ、えのめ荘の皆さんとキャットたち！

珠洲市も全然すずしくなかった

行きとは違うほうの橋を渡って半島（本州）に戻る。立派な黒い瓦屋根の家々が立つ海岸線を北上し、能登半島の先端にある珠洲に向かう。「道の駅すずなり」

でひと休み。珠洲名産の塩の入ったソフトクリームを食べる。「外で食べるとトンビが狙ってくるので注意してください」と

店員さん。マジっすか！？　が、猛暑のため、トンビに奪われる間もなくミルミル融けてしまう。急いで食べるが、５分もすると崩壊してベタベタに。同じ目に遭った人たちがトイレに手を洗いに来る。同志の連帯感。それはともかく、塩入りソフトは美味であった。

道の駅の建物のすぐ横には廃線となった駅のプラットフォームが残されており、それを活用しての自分たちの作った野菜や果物などを直売している人たちもいた。明るい笑顔が迎えてくれる。道の駅も市場もそれぞれ地元のＮＰＯが運営しているそうで、元気な活動の例だろう。

ここで、新たに２名が合流。ひとりは、のとガールのなかで今回では最後の登場を飾るなほさん。道の駅で手作りのお菓子を売っているそうだ。

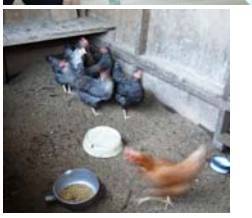
もうひとりは６人目の参加者ゼニガタさん（仮名）。地元珠洲に住む若者だ。マチの大学を出てすぐ地元の銀行にこの春就職したばかりとのこと。銀行の窓口に来たあき姐さんにツアーへの参加を逆勧誘されたらしい。若いのに故郷に戻り、その魅力を再発見したいという。エラい！

果樹園で農作業体験第２弾

このあと、珠洲市内の果樹園に行き農作業のお手伝い。ツアー中の農作業体験第２弾だ。経営者のご主人の指示を受ける。仕事の内容は、リンゴの実を包んでいた紙を剥ぐ、栗を拾う、梨の木に水をまく、など。暑いから適当に休みながらでいいよー、と気遣ってくれる。

木陰で休憩。もぎたての梨やリンゴをいただきながら話を聞く。薪のストーブや風呂を広めたいというご主人。資源が循環し、体は健康になり、高齢者も働ける。被災地への支援にもなるという仕組み作り。その中心にあるのが薪。こういう話を聞くとワクワクする僕がいる。このツアーの参加者は僕だけでなくみんなそのような「仕組み」に関心があるはずだから、とっても貴重な時間となる。

昼になると仕事を切り上げて昼食。よその土地から移ってきてこの農園の敷地内に家



を建てて住みついている人がいるという。昼食の場所はその素敵なお宅。アポなしだったようだが快く受け入れてくれる。

なほさんが用意してくれた食材でサンドウィッチを手分けして作る。ご主人のお母さんが炊いてくれたという栗ごはんとお新香もおいしい。

食後の一服はコーヒー。珠洲の「二三味（にざみ）珈琲」の豆をその場で挽いて沸かしてくれる。コーヒーをいただきながらさらに話を聞く。ご主人は俳優の阿部寛さんのように深い低音の声。それを告げると本人は妙に照れていた。遠赤外線で体がポカポカする薪の効果や、脾臓や免疫など東洋医学にまで話題が広がる。いろいろなことをとてもよく勉強されているようだ。奥さんは宮崎から嫁いできたという。素敵なご夫妻だ。

残念だけど出発の時間が来てしまう。バスに戻る道すがら、林のなかでキクラゲを摘み取らしてもらう。よそから移り住んだ人に教えてもらうまで、これが食べられるキクラゲだと気づかず放置されていたという話も面白い。のとガールの活動と同じで、よそ者の視点から魅力が見つかる例かもしれない。一家と別れて出発。

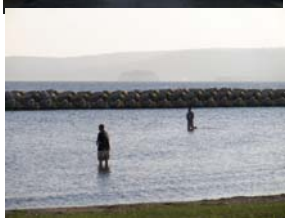
レトロ銭湯、海岸、そして謎のゆるキャラ

この日も炎天下の農作業をしたのでさっぱりと汗を流したいところ。銭湯で途中下車。この銭湯は昭和の香りムンムンの素敵な場所であった。

なぜかスイスっぽい風景の男湯の絵。よく見るとペンキでなくタイルを並べて描かれている

銭湯から出て左手 100 メートルくらいの距離だろうか。鳥居が見える。鳥居の先は日本海。風呂上がりの何人かで連れ立って歩いていく。鳥居をくぐるとすぐに砂浜がある。波打ち際に行くと、ゼニガタさんが石を拾う。

「例のアレ、やりましょうよ！」　水辺に石を見つけると水切りをしたくなる本能は男子の専売特許かと思っていたが、女子のゼニガタさんから提案されるとは！　さぞ上級者に違いない。男子の面目にかけて負けるわけにはいかない。対決の火ぶたが切って落とされる。



しかし、結果はあっけなかった。ゼニガタさんは実は初級者で、２、３回弾ませるのがせいぜいだった。残念ながら投げる方向も安定しない。何回目かの渾身の一投は力みすぎか、なんと真左（直角）に飛んでしまった。水際のラインと平行に転がる石。水面に届きすらしないというまさかの結果。ずっこけて「マイナスかよ！」と突っ込む僕。「せめてゼロくらいにしてくださいよ」と答えるゼニガタさん。こんなうまい返し方を瞬時にできるとは！本当に 20 代前半なのか？　やるな、ゼニガタ！　君はオジサンキラーになれる！（えっ、別になりたくないって？）

銭湯前に戻る。海岸と直角に伸びる一本道。銭湯の場所のそのずっと先にはもうひとつ鳥居と神社が見える。海からつながる神への道。その参道を我々は歩いているのだった。

ふたたびバスに乗り込み、その日の宿となるゲストハウスに向かう。ゲストハウスでは食べ物飲み物は自分たちで調達することになる。途中で「ダイマル」に寄って、ビールやジュースなど飲み物を調達するという。ダイマルって、あのデパートの大丸？　能登半島

の先端にデパートがあるのか！？・・・などとつぶやいている間に店に到着。

大きな食品スーパー兼酒屋が大丸の正体だった。入口前には某漫画キャラクターに似た石像が出迎えている。あくまでオリジナルのキャラだという。名前は不明。ここでは「スズえもん」（仮名）と呼ぶことにする。スズえもんはなぜか幼稚園児が着るスモックのような服を着ている。この理由も不明。

ノッポさんが推測する。もしかするとスズえもんにはお腹のポケットがないかも。なるほど！　おそるおそるスモックをめくってみる。本当だ、どうやらないようだ。が、念のためさらに上までまくってみる。「スズえもんさん、ごめんなさい」と心のなかでつぶやきながら。すると、あった！　お腹というより胸くらいの位置にポケット発見！

後日検索してウェブサイトの写真を見る。冬にはサンタクロースになったりもするらしい。ご当地キャラとしての地位をそれなりにきちんと築いているようだ。日本広しといえども、まさか国内でこのようなキャラを見られるとは！　スゴいぞ、珠洲！

酒、料理、語り合い、すべてがごちそう

ゲストハウスに着くと、若い頃の喜名昌吉さんを連想させる男性とともになほさんが夕食を作っている。我々もお手伝い。なほさんから指示が飛ぶ。食器の場所から何から勝手が分からない我ら。しかし、なほさんは決して手取り足取り教えない。自分で考えさせるのがなほさんスタイル。協力隊のときもきっとそうだったのだろうと想像。

料理が完成。新鮮な刺身を手巻き寿司で食べる。さっきのキクラゲもゴーヤーとともに炒められて食卓に。

厨房にいた男性は地元の酒蔵の杜氏さんと紹介される。秋から７か月は米、水、麹と格闘の日々。頭を丸めて仕事に入り、酒蔵に住み込んで仕込むそうだ。春からの５か月は完全に自由になり、陶芸に打ち込むとのこと。この人のここに至る人生の道筋もとても独特で、語り合いは刺激的だ。差し入れてもらった酒は絶品。刺身とともに胃に沁みわたる。

ツアー最後の夜ということもあり、深夜まで飲み続ける。学生時代のノリかな？　こうして、２日目もフルコースを無事に完了。明日はいよいよ最終日だ。

またもや快晴の３日目

３日目の朝。再び快晴。朝日が強烈だ。ノッポさんはこの日も先に起きて身支度。エラい！　僕も鈍い動作で起き上がり、顔を洗って１階の厨房へ下りていく。前夜の酒が少し体に残っているし、寝不足でチト疲れている。

が、今日は最終日。再び農作業体験もある。朝ごはんをしっかり食べて元気になるのだ。あれ、ノッポさんの姿がない。くみさんによると体調不良で休んでいるとのこと。さっきまで元気に動き回っていたようだが、あれは妄想だったのだろうか？　狐につままれたような気分になる。後で聞いたところ、二日酔いに襲われてしまったらしい。このあと午前の稲刈り作業には不参加だったが午前の後半から見事に復活した。

棚田での稲刈りとハザかけ

８時半、ゲストハウスを出発し、棚田での農作業体験のために移動。棚田の神社前で待ち合わせ。受け入れてくれる農家は、親世代から 30 代の息子さんに世代交代中。傾斜地にひな壇のように連なる田んぼ。黄金色の稲穂がまぶしい。

炎天下の田んぼに入り、鎌の持ち方から手取り足取り教えてもらう。刈った稲をわらで束ねる。コツを教えてもらうがなかなか身に付かない。何十回目かにようやく流れる動作でうまくできるようになる。嬉しい。

田んぼの端のほうは手作業が必要だが、それ以外はバインダーという機械の出番だ。刈った稲をすぐさま束ねてしまう優れモノ。シャクだけど人力ではまったくかなわない機械の力を見せつけられる。

続いて、束ねた稲を「はざ」にかける作業。束を二股の形に広げて、縦横に組まれた棒に載せていく。高いところは梯子に登る。下から稲の束を投げ上げてもらう。タイミングとコントロールが大切。慣れない我らとちがって、家族コンビだと息もぴったりだ。

日陰で休憩。ガリガリ君のアイスを振る舞ってくれる。後で知ったのだが、この日の珠洲は最高気温 34.5 度。９月も半ば過ぎというのに猛烈な暑さであった。

こちらの家族も素敵で、「鶴瓶の家族に乾杯」を思い出してしまった。お父さんの笑顔と明るさが弾けていた。会話のなかでお父さんが何か聞き逃すと、お母さんから「きょう耳日曜！」と突っ込みが。昭和の懐かしい流行語を何十年ぶりかに聞く。記憶の引き出しが開いて大感激！

棚田でコメを作るのは大変だが、丁寧にやることで質がよく価値の高い商品にしようという取り組みを頑張っているようだ。これも貴重な訪問であった。

最後のメシと振りかえり

お昼はなほさんが借りて住んでいる家にお邪魔して昼食。スパイスの香り豊かなココナッツ・ミルクのカレーをいただく。料理という技能をもって青年海外協力隊員として海を渡ったなほさん。彼女の手にかかればどんな料理もおいしいことは言うまでもない。

食事が終わるとツアー全体の振りかえり。進行はゆかさん。今回のツアーではいつもその役割を務めてきた。人を見る目が確かで、ときどき鋭いコメントを返してくれる。「気づきの名人」だ。

みんなで順番に感想を言う。この時間こそ、このツアーの特徴のひとつだ。単なる余暇でなく、考える旅だから。お互いに語り合うことで、自分の考えもはっ

きりしてくる。

午後３時に終了。名残惜しいが珠洲を発って金沢駅に向かう。その車中でも、「国際協力と地域づくり」の話や、それぞれの人のこれからの生き方についての深い会話が続いた。そのなかに、よっぽど親しい人にしか話さないような自分自身のことを、ごく自然に語る僕もいた。そのように心を開き合うのに、この３日間は十分な時間だった。

午後６時少し前に金沢駅に到着。３日間安全運転してくれた運転手さんたちに感謝。帰路を急ぐ人たちもいるので、余韻を楽しむ暇もなく別れを告げて解散。こうして能登ライフツアーは完結した。

マチに戻って想うこと

ツアーから戻り、再びマチの人になる。週末の朝、自分への土産として買ってきた二三味珈琲の「舟小屋ブレンド」の豆を挽き、深煎りのアロマと味を楽しむ。至福。

能登では食事がすべて美味しくて、普段の倍くらい食べたので、僕の下っ腹はちょっぴりまぁそくなっていた。「まぁそい」は「まるまる育った」というような意味の能登島の方言とのこと。そういう題名のタウン誌も出ている。マチの生活でだんだん元通りにお腹が引っ込んでくるのが嬉しいような寂しいような。

自分の心の一部はまだ能登にいるような気がする。逆に、僕と一緒にマチについてきたのは「すずなりさん」。道の駅の買い物でもらった袋に印刷されたキャラクターだ。いつでも穏やかに微笑んでいる。検索すると、ブログではカラフルに描かれ性別も一目瞭然。でも、ビニール袋のすずなりさんも味わい深くて好きだ。

このツアーで何を感じたのか。自分のなかで何が変わったのか。答えはすぐに出ないだろう。僕は思考速度が遅いのでなおさらだ（脳ミソ日曜？）。でも、無理に急ぐ必要はない。日々の生活の中で無意識に反芻しながら、じっくり探せばよい。いつもにこやかなすずなりさんと向かい合いながら、自分自身とも向き合ってみることにしよう。

のとガールの正体

最初は謎だったのとガール。どのような人たちなのか、ツアーを通して分かってきた。みな青年海外協力隊の OG で、能登に I ターン・U ターンして地域の活性化に尽力している。協力隊の OB・OG は都道府県ごとにゆるやかに組織化されており、それが彼女たちをつなげたようだ。協力隊経験がなくても志があれば加入できるらしい。

僕は今回、ツアーの内容そのものだけでなく、運営のしかたについても関心があった。これまで自分自身も仕事のなかでスタディツアーや研修を企画・運営したことがあるので、苦労も喜びもよく分かるつもりだ。そして、そのような経験のせいで、どうしてもアラが目に付きやすくなってしまう傾向もある気がする。

今回のツアーに関して言えば、不満はまったくなかった。100 点満点で 120 点。大満足！

一体どこがよかったのだろう？　訪問先はどこも素晴らしかった。農作業体験や地元の人との対話の組み方も絶妙であった。3 日間という時間のなかで、スカスカでも詰め込みすぎでもなく「ちょうどよい」密度だった。みんなで話し合う時間も有意義だった。

今回のツアーで通算 6 回目とのこと。過去の結果を見ると、毎回工夫を重ねている跡がうかがえる。

のとガールを略すと「ＮＧ」になってしまうが、実際はＮＧと正反対。ベリー・グッドだ。地元の活動を盛り上げるために、自ら前に出る覚悟をもったのだ。どっしり地に足が着いている。地元のイベントで「ご当地アイドル」と共演したりするが、決して図に乗ったりすることはない。そうか、だから「ズ」のない「のとガール」だったのか！　素晴らしいぜ、のとガール（たち）！

おしまい。

余談：地元の人たちは能登半島を左手で表現する。その方法は写真のとおり二通り。これらを使いこなせればすっかり能登通!?

おまけ１：テレビに出たぞー！

実は、このツアーには地元テレビ局の取材があった。初日、のとじまファームで撮影してからほんの数時間後の夕方７時前に放送されるのをえのめ荘でみんなで見て興奮。取材した記者さんも我々とともにえのめ荘にいたので不思議な感じ。我々が畑仕事でバテていたころ、ファームの事務所から映像と原稿をインターネット経由で放送局に送っていたのだ。

テレビに自分が映って興奮するわけではないが、今回、この取材があったことはひとつの特典だったなーと後で感じた。残念ながら大ベテランというカメラマン氏はすぐに帰ってしまい、じっくり話せなかった。しかし、記者さんは翌日の途中までツアーに同行したので、ツアーの仲間のような感じである程度ゆっくり話をすることもできた。

放送される番組の時間とそこで伝えられる言葉は限られている。でも、直接会って会話すれば、この取材に至る動機が分かってくる。彼女のこれまでの人生があって、もちろん記者としての数々の経験があって、この日この場にいるのだ。それはツアーの主催者も参加者もみな同じこと。一時的に集まったグループ。偶然の組み合わせ。でも、そこには我々をその時その場所でつなげた何かがやはりあるのだろう。

おまけ２：忍者の電話番号！？

これも余談だが、ツアーが終わった翌日、僕は半日金沢で観光する時間があった。そこで、ツアーの最後にみんながおすすめの場所を教えてくれた。全員一致だったのが妙立寺（みょうりゅうじ）であった。この寺には色々な仕掛けがあって、別名「忍者寺」と呼ばれている。

すると、のとガールのくみさんが携帯電話を取り出して、その画面を僕に見せてくれた。「忍者 076-XXX-XXXX」という表示。事前に予約が必要なので、妙立寺の電話番号を教えてくれたのだった。何という優しさ！　しかし、まるで忍者の電話番号みたいで思わず吹き出してしまった。

翌朝、ホテルからその番号にかけると、確かに見学するには事前予約が必要で、時間も指定されるとのこと。１０時からの回でお願いした。現地に行くと、平日にもかかわらず結構な人の入りで、予約した時間ごとにグループで見学コースを回ることが分かった。スタッフの女性たちは白いブラウスと紺色のスカートという地味な制服を着ていて、各グループに１名ずつガイドとして付くことになっている。最初に座ってテープに録音された解説を聴き、そのあとにガイドに導かれて寺のなかをぐるっと回る方式だ。ガイドさんの説明もテープと同じように決められた言葉を隅々まで暗記したような感じ。

寺のからくりはどれも見事で、説明も分かりやすかった。実際期待どおりで大いに満足した。でも、僕にとって一番面白かったのは、まるで自分が工場のベルトコンベアーに載せられて建物のなかを巡ったような感覚だった。正確な説明と段取りによって粛々と処理されていく我々見学者たち。次の機会に別のガイドに案内してもらってもほぼ完全に同じ内容となるだろう。ある意味では、不良品の出ない完璧な品質管理。

これは、のとライフ体験ツアーと正反対だな、と感じた。のとツアーは、そのときどきで行程が変わるし、仮にまったく同じ行程で実施したとしても、参加する人たちの組み合わせによって結果は違ったものになるだろう。「そのとき一回限り」なのだ。忍者寺の見学には満足だが、のとツアーが忍者寺方式だったらがっかりだったろう。そんなことをふと思うのだった。

のとガールたちがこれからどのような活動をするか分からないが、どうやらのとツアーは続きそうである。今後の活動を話し合うワークショップの写真のなかで、くみさんが自ら「のとツアー」と書いた紙を持っているのを発見。これまで毎回準備段階からとても大変だがやりがいもあると言っていた、その熱意は冷めていないようだ。ナイス！

運営する人も参加する人も、そして訪問を受け入れる人も、みなそれぞれが「生きざま」を持ち寄ることで、オンリーワンの体験となる。機会があれば僕もまた参加してみたい。何度参加しても新しい発見があるはずだから。

おまけ３：エイリアンの目！？

ツアー最後の振り返りのときに、「『国際』の要素がほとんどなかったのが事前の予想と少し違っていた」とひとこと僕がつぶやいたため、帰りの車中であきさんはじめ皆さんとさらに話し合うことになった。でも、みんなの意見を聞いて納得。あまりに話題を広げすぎるとかえってどれもおろそかになってしまうから、ちょうどこのくらいでよかったのだ。青年海外協力隊としての経験がどのように地域づくりの活動につながっているのかについても、配ってもらった新聞や雑誌の記事を読むと理解できた。それで十分だろう。

僕の問題提起にあきさんたちが反応を示したのは、ちょうど彼女たちも国際経験と地域づくりの関係について整理しようとしていたからだと後で知ることとなる。それは、ツアーが終わってふた月後にのとガールが主催した２日間のワークショップのプログラムから見て取れた。僕はワークショップに参加できなかったので詳しくは分からないが、自分なりにはっきりしてきたことがある。

それは、海外に行った人間は、そこで外国人として生活することになる。言葉や生活習慣や、場合によっては外見がまったく異なる「よそ者」、つまりエイリアンとして暮らすのである。現地のしきたりにとまどい、カルチャーショックを経験することもある。ホームシックにかかることもある。それを乗り越えたところに相互理解がある。現地の人同士の相互理解とはまた違う深みのある関係ができる。元々は異質のエイリアンだったのだから。

外の世界をひとたび知ると、自分の元の文化や風土を知りたくなる。しかし、外にわざわざ飛び出した自分は、元々属していたはずの社会において（もしかすると家族においてすら）エイリアンのような存在になることがある。違う世界を見たために、自分の属する場所の風習に疑問を感じることもある。逆カルチャーショックだ。

最初から異質と覚悟のうえで経験するカルチャーショックよりも、「以前は当たり前と思っていたこと」に納得が行かなくなる逆カルチャーショックのほうが辛いことがある。自分の生まれ育った星にいながらエイリアンになってしまう気分だろうか。

マチから田舎に移り住むというのは、エイリアンとなることを意味するのかもしれない。それは、Ｉターンだけでなくｕターンでも当てはまるかもしれない。

それにしてもＩターンというのは不思議な言葉だ。「Ｉ」という文字の一体どこにターンがあるのだろうかとじっと見つめてみたが、どこにも見つからなかった。これだけ注目させる言葉なのだから、造語としては大成功だろう。ターンのない、一方通行の移住であれば、異質の文化に飛び込むと覚悟を持ったエイリアンである。

Ｕターンの場合は、外の暮らしを経験しただけに、逆カルチャーショックの可能性がある。本人が知らないうちに、話し方や態度が変わってしまったという場合もある。微妙なエイリアンである。

海外に出たことで日本でのＩターン・Ｕターンにも役立つというのは、このエイリアン経験ではないかと思う。エイリアンになることを恐れない勇気というのも役に立つことがあるだろう。

地元の人たちとエイリアンとはうまく交じり合えないかもしれない。接すれば衝突が待っているかもしれない。だが、違いを認め合うことはできる。同化することと理解し合うことは別だから。今回のツアーで出会った人びとが、それぞれの持ち場でエイリアンとして存在価値を発揮する姿を思い浮かべることができた。自分はどうだろう。

初日に通った千里浜の北寄りのほうは羽咋（はくい）市といって、ＵＦＯによる町おこしで有名だ（実は地域づくり業界では有名なところだった！）。でも、羽咋に行かずともエイリアンに遭遇することはできる。それは自分のなかにもいるのだから。・・・などと言っていると、映画のエイリアンの気持ち悪い映像が浮かんでくるので、この話題はこのへんで終わりにしよう。

同志たちへ

ツアー参加者メンバーには、僕が勝手な呼び名をつけて勝手な解釈で描写してしまった。そのお詫びと、貴重な経験を共有できたことへのお礼をこめて、ひとりひとりにメッセージを送りたい。

まずノイさん。呼び名は出身地から取ったもの。言葉の壁があったはずだが、いつもコメントは最もファンタスティックだった。物事を見る目がきちんとでき

ているのだろうと感心させられた。写真の腕も相当なものだった。センスを持っているのだろう。日本での残りの日々が実り多いものになりますように！

ザンスーさんはノイさんの通訳の役目もかなりやってくれていた。彼女自身には目の前に三つの道がある。どれを選ぶのか、楽しみだ。どれも正解なのだろうと思う。このことを最終日の車中でみんなと一緒に考えさせてもらったのもよい思い出だ。シャンプーのパッケージデザインはファンタスティック！　バスでずっとお隣の席だったのだが、僕のために金沢観光の情報をスマホで調べてくれているとき、お友達からのメールの書き出しに「すーざん」と書いてあるようなのが目に入ってしまったのだ（わざと見たのではないけど、とにかくごめんなさい）。これがあだ名？　未確認だが、勝手にそう解釈しよう。そして、そのままだと能がないので業界人っぽくひっくり返して付けた呼び名がザンスーでござんす。

ケロさんの由来は、ごく単純に元々のニックネームのひとひねり。普段の仕事の一環としてツアーに参加した唯一のメンバーかな？　被災地復興のための仕事のアイデアを集めるという、明確な軸があっての参加だった。こちらもその横で大いに勉強させてもらった。僕にとっての「東北発☆未来塾」だった感じ。漠然とでなく、考える軸が一本しっかりあるというのは強いね。健闘を祈る！

ノッポさんの由来は言うまでもないだろう。敷かれたレールにそのまま乗っていくのでなく、脱線していく過程を正しく（？）進んでいるようだ。それはきっとよい選択。そして、ここまで育て、応援してくれた人たちへの心遣いも忘れない。君自身の持ち場で大いに活躍してちょーだい。楽しみだ。

ゼニガタさんの由来は、声優さんとアニメのキャラクターから。銀行員だからなおさらピッタリでしょう！？　君はいずれ珠洲の星になるだろう。のとガール入りも間近か！？　石の投げ方はもっと練習が必要。再び珠洲の海岸で水切り対決できるときを楽しみにしてるぞー！

ほんとにおしまい。